

1 富永 亜希 トランペット

梅田 なつみ ピアノ



PROFILE

広島県呉市出身。中学からトランペットを始める。呉市立呉高等学校卒業後、広島文化学園大学学芸学部音楽学科入学。トランペットを白石実氏、村上俊也氏に師事。室内楽を白石実氏に師事。

トランペット協奏曲 第1番 ハ短調

作曲/V.ペスキン

V.Peskin (1906~1988, ロシア) : Concerto No.1 C minor 1st movement

ペスキンは、1930年代に家族の生活を支えるためにバラライカオーケストラのピアニストとなった後に、ロシアが誇るトランペット奏者ティモフェイ・ドクシツェルのピアノ伴奏者となった。トランペットとピアノの為に数多くの作品を残し、その間に作曲されたのがトランペット協奏曲ハ短調である。さまざまな感情が盛り込まれたような非常に情熱的な音楽が印象的で、トランペットとピアノがともにソリストティックな役割を持って叙情的に曲が進められる。技術的に高度なトランペット協奏曲のレパートリーとして知られている。

2 北谷 駿 クラリネット

久保 綾香 ピアノ



PROFILE

広島市出身。12歳よりクラリネットを始める。2018年、広島文化学園大学学芸学部音楽学科に入学。第11回岐阜国際音楽祭コンクール管楽器部門大学専門にて2位を受賞。クラリネットを品川秀世、東谷聖悟、両氏に師事。室内楽を上田啓二、多田愉可、両氏に師事。

歌劇「リゴレット」による演奏会用幻想曲

作曲/L.バッシ

L.Bassi (1833~1871, イタリア) : Fantasia da concerto su motivi del "Rigoletto" di Giuseppe Verdi

スカラ座の首席クラリネット奏者でもあり作曲家であったバッシはスカラ座で演奏した多くのオペラのテーマからインスピレーションを受け多くのクラリネット曲を残している。この作品は其中でも一番有名なバッシの作品となり、現在でも非常に挑戦的なクラリネット曲となっている。バッシが驚くほどの息の長さ持久力の持ち主であったことが楽譜から読み取れる。後半に向けての息のコントロールには注意を要し、この曲のために多くの奏者が循環呼吸を試みた。《リゴレット》のテーマがクラリネットらしい装飾で技巧的に展開される。

3 下川 信治 ベース

坂本 直哉 ドラム 田中 冬真 電子オルガン



PROFILE

高校時代からベースを始め、広島文化学園大学学芸学部音楽学科で中野力氏のもと本格的にベースを学ぶ。在学中、広島市内のライブハウス、ホールでのライブに多数出演。2019年には日本を代表するジャズピアニスト小野塚晃氏と共演。学内オーディションを経て2021年定期演奏会に出演。ベースの他に、副科実技としてドラム、ポピュラーピアノ、クラシックギターを学ぶ。

Slang

作曲/J.パストリアス

Jaco Pastorius (1951~1987, アメリカ合衆国) : Slang

Mr.Pink

作曲/M.キング

Mark King (1958~, イングランド) : Mr.Pink

“Slang”はジャズ、フュージョンバンドWeather Reportのアルバムに収録された楽曲。E.ベースの奏法に革命をもたらした才能あるJacoは37年間という短い生涯であった。エフェクターによりフレーズをループさせ、特定のリズムを作った上にソロ演奏を重ねる等当時としては革新的な手法を使った。(本日はルーパーを使用し演奏)。

“Mr.Pink”は英国のフュージョンバンドLevel42の楽曲。リーダーのベーシストMark kingは16分音符を多用する高速スラップ奏法を得意としており、彼の技巧的な楽曲の一つとなった。

4 土井 咲也 ギター

木村 蓮翔 ドラム 梅林 均 ベース



PROFILE

山口県立防府西高等学校出身。在学中、吹奏楽部に所属し弦楽器全般を担当。2019年元DIMENSINのキーボーディストである小野塚晃氏と共演。日本のJ.ポップ研究家としても知られる北テキサス大学教授Dr.Capitalと2020年リモートによる共演をし、現在配信されている。学内オーディションを経て2021年定期演奏会に出演。広島文化学園大学在学中は広島市内を中心に多数ライブに参加出演している。第43回広島市新人演奏会出演予定。小田原政広氏に師事。

The Wilhelm Scream

作曲/J.ブレイク

James Blake (1988~, イングランド) : The Wilhelm Scream

Moai's Tihai

作曲/小沼ようすけ

Y.Onuma (1974~, 日本) : Moai's Tihai

“The Wilhelm Scream”は英国のシンガーソングライター、J.ブレイクの楽曲です。彼は幼少期、クラシックピアノを学び、ロンドン大学ではポピュラー音楽を学びました。バリトン音域の持ち主です。本日はトム・ミッシュによるカバーを、ルーパーという音を録音して重ねることができる機械を使用して演奏します。

“moai's tihai”は日本のジャズギタリストである小沼ようすけの楽曲で、カリブ海の島グアドループの民族音楽“グオッカ”を取り入れています。変拍子や独特のリズムが印象的です。

5 名原 雄大 声楽(バリトン) 猪田 桂子 ピアノ



君なんかもう

作曲／F.トスティ

F.Tosti (1846～1916, イタリア) : Non t'amo piu.

二人の擲弾兵

作曲／R.シューマン

R.Schumann (1810～1856, ドイツ) : Die beiden Grenadiere.

セビリアの理髪師

作曲／G.ロッシーニ

G.Rossini (1792～1868, イタリア) : Il Barbiere di Siviglia

「君なんかもう」は、昔の恋人との甘い思い出と、裏切りの悲しみを美しい旋律に乗せてドラマチックに歌い上げる。「二人の擲弾兵」は、ロシアで大敗を喫したナポレオン軍の残兵2人の会話が歌詞になっている。重々しく始まるが、後半ではフランス国歌を用いて高らかに故郷への強い想いを歌っている。「セビリアの理髪師」は、18世紀のスペインを舞台に、コミカルなオペラとなっている。理髪師のフィガロは「俺は街の何でも屋。いろんな人から声がかかり、それこそが理髪師の幸せなのだ!」と、速いテンポに乗せて明るく陽気に歌う。

PROFILE

島根県出雲市出身。出雲北陵高等学校卒業後、音楽特別奨学生として広島文化学園大学学芸学部音楽学科に入学。同大学の「第1回フレッシュマンコンサート」「スペシャルサマーコンサート」に出演。第13回松江プラバ音楽コンクール歌唱部門金賞を受賞。これまでに、飯島聡志、山下敬子、藤井雄介、平福千夏の各氏に師事。

6 芳之内 実来 ホルン 羽賀 美歩 ピアノ



ホルン協奏曲 作品23

作曲／A.キール

A.Kiel (1813～1871, ドイツ) : Concerto for Horn Op.23

ヴァルブホルンが発明されて間もないところにデトモルト宮廷楽団のホルン奏者、アウグスト・コルデスのために作曲された協奏曲である。第1楽章は激しいアレグロ・アパッショナートで始まり、冒頭のテーマは楽章全体で変化し、冒頭のトゥッティの素材が各セクションを統一している。第2楽章はLarghetto con motoと書かれており、フランツ・シュトラウスのホルン協奏曲op.8の第2楽章を彷彿とさせる和声とスタイルで、叙情的となっている。第3楽章のロンドは、16分音符、16分3連符、そしてホルンの音域を超えた速いテンポでの大きな跳躍があり、非常に器用さが要求される。

PROFILE

愛媛県松山市出身。愛媛県立伊予高等学校を卒業後、広島文化学園大学に音楽特別奨学生として入学。在学中よりプロオーケストラ、吹奏楽団にエキストラとして出演。ホルンを倉持幸朋、上原宏の各氏に師事。ラッセ・マウリツェン、ナイジェル・ダウニング、福川伸陽の各氏のマスタークラスを受講。

7 安部 柚希 打楽器(マリンバ)



マリンバ独奏のための飛天生動Ⅲ

作曲／石井眞木

M.Ishii (1936～2003, 日本) : HITEN-SEIDO III for marimba solo op.75

飛天生動とは、天女が飛翔する様子である『飛天』と、中国の絵画理論の中で優劣の基準となった画の六法のうち、最も重んじられた「気韻生動：調和のとれたリズムを持ち、見る人を感動させる力があること」の『生動』から造られた言葉。唐の時代になり輪郭描法が導入されてから、中空に浮かび華やかに描かれるようになった飛天。それ以前の時代の飛天は隈取りも厚く飛翔感には欠けるが、そこにはたしかな存在感がある。石井眞木はその重厚な色彩感と原始性からインスピレーションを受け、この曲を書いたと言われている。

PROFILE

3歳より私立音楽院にて歌・ダンス・ピアノを習い、9歳より打楽器を始める。広島修道大学附属鈴峯女子高等学校を卒業後、広島文化学園大学学芸学部音楽学科に入学し、成績優秀者として奨学金を受ける。学長推薦を受け、第43回広島市新人演奏会に出演予定。打楽器を山澤洋之、岡部亮登、畑山洋平の各氏に師事。ドラムス・ラテンパーカッションを折田吉弘氏に師事。室内楽を山澤洋之、佐藤須美子の各氏に師事。

8 村上 怜 サクソフォン 片山 敦子 ピアノ



サクソフォン協奏曲

作曲／H.トマジ

H.Tomasi (1901～1971, フランス) : Conterto pour Saxophone Alto

1949年に作曲されたサクソフォン協奏曲は複数のテーマを用いた抒情的で、舞曲を思わせる陽気さを持つ第一楽章(Andante et Allegro)と「呼びかけと応答」の掛け合いが特徴となっている第二楽章(副題"Giration"は"旋回"の意)から成っている。北アフリカなどの民族音楽に影響を受けたトマジのオリエンタルな音階や躍動感のあるリズムの断片が旋回運動的に展開。最後に第1楽章の旋律が回想的に現れ、曲は劇場音楽を彷彿とさせ幕を閉じる。

PROFILE

12歳よりサクソフォンを始め、特別奨学生として広島文化学園大学学芸学部音楽学科に入学。学長推薦を受け第43回広島市新人演奏会出演予定。第22回大阪国際音楽コンクールAge-U木管楽器部門にてエスポアル賞受賞。在学中よりソロ、アンサンブルによる演奏活動をしている。サクソフォンを加藤和也、宮田麻美、上田啓二の各氏に、室内楽を上田啓二、多田愉可、山澤洋之の各氏に師事。